

ニコライ・トルベツコイの作品翻訳

芳之内 雄二

翻訳に用いた底本は『Н.С.Трубецкой История・Культура・Язык』Москва, Прогресс, 1995である。「ロシア文化の上層と下層」はp 126—140、「バベルの塔と言語混乱」はp 327—338を使用した。前者の初出は、1921年にブルガリアのソフィアで刊行された『東方への脱出』中のp 86—103に収められている。後者は1923年にベルリンで、ユーラシア不定期刊行物として出されている。

ニコライ・セルゲーヴィッチ・トルベツコイの略歴

1890年、モスクワで生まれる。父親は、モスクワ大学教授（その後同学長）、専門は宗教哲学。トルベツコイ家は西ロシアを支配した1350年代のリトアニア大公ゲディミナス家の流れを汲むロシアの大貴族として知られている。

ニコライはギムナジウム（中学校）在学時代から民俗学、歴史学、哲学に深い関心を持ちだした。

1908年モスクワ大学歴史文学部に入学、1913年モスクワ大学比較言語学科の第1期卒業生となり、大学に残る。1913—14年には研修者としてライプチヒ大学で青年文法学派の講義を聴講している。帰国後、北カフカス民俗学、フィン・ウゴル諸言語問題そしてスラブ学関係分野の論文を発表。ロシア革命後、大学での順調な仕事は続けられなくなり、地方に去って、しばらく疎開生活をおくる。

1920年にブルガリアに移住。ソフィア大学で研究教育活動に従事した。この年に、有名な小冊子『ヨーロッパと人類』を発表、その理念が、後の「ユーラシア主義」思想の中核となった。

1922年、ウィーン大学からスラブ学講座主任として招聘された。

1920年代末、ヤコブソン、マテジウスとともにプラーク学派の創設者となった。

1938年、心臓発作が原因で死亡。

ユーラシア主義思想家としての著作の背景

ニコライ・トルベツコイは『音韻論の原理』の著者として、言語学者の間ではよく知られた存在である。研究者としてのトルベツコイのスタートは、フィン・ウゴル諸言語や北カフカス諸言語、さらにこれらの言語と深い結びつきを持つ民族学や歴史、文化などの分野であった。

トルベツコイのもう一つの側面として、「ユーラシア主義」思想家としての顔がある。「ユーラシア主義」思想の中心的な理念は、ロシア人の自己認識としてウラル・アルタイ系の文化要素を認識して自ら「ユーラシア人」のアイデンティティを持つべきである、とする考えである。この考え方は、自己中心の社会進化主義思想に基づく西欧の世界（の植民地）制覇の意図に対抗するイデオロギーでもあった。この思想は、1920年—1930年代に、亡命ロシア人知識層の間で広まりを見せた。

トルベツコイは「ユーラシア主義」の端緒となった著書『ヨーロッパと人類について』を書いた背景を、友人のロマン・ヤコブソンに宛てた手紙の中で次のように説明している。

この本は、10年ほど前から考えていたものであり、当初は『ナショナリズムの擁護』というタイトルで三部作からなる予定でした。第1部は『自己中心主義』、第2部は『真のナショナリズムと偽りのナショナリズム』、第3部は『ロシア的要素』だったのです。今は、第1部をより明確なタイトル『ヨーロッパと人類』に変更しました。この本の目的はまったく否定的なものです。肯定的、具体的、指導的ないかなる原理も示していません。もっぱら、名だたる偶像を引き倒し、倒れ落ちて何もない台座の前に読者を立たせ、自らの頭で出口を探すよう仕向けることを目的としています。出口は三部作の第2部で示す予定です。この本の中で重要なところは、「自己中心主義」と「他者中心主義」です。そして、私が示す唯一の可能な出口は意識革命、非ローマ・ゲルマン民族知識人の思想革命です。意識革命の要点は自己中心主義と他者中心主義の完全な克服にあります。私も如何なる何者も地球の中心ではなく、すべての民族と文化は同等であり、身分の高い者や低い者は存在しない—こうしたことを私の本は読者に要求しています。如何なる文化も外からの借用なしでは不可能であるが、借用は必ずしも「他者中心主義」を前提としているものではない、—ということを私は指摘したかっただけです。

「ロシア文化の上層と下層（ロシア文化のエトノス基盤）」

あらゆる分別的文化は二つの部分をきまって内包する。それは比喩的に、文化建築物の上層と下層と呼ぶことができる。下層とはいわゆる大衆 — 民族全体の最も幅広い社会層の欲求を充足させる文化価値貯蔵庫のことである。そうした文化価値は大衆社会の中で創造されるので、比較的簡素なものであり、個人的創造による際立った刻印は持たない。文化価値の一部が上層から下層に侵入する場合には、それらは下層生まれの異なる文化へ順応しつつ若干没個性的なものに変わる。文化建築の上層は若干異なった性質を持つ。下層の文化価値が満足させることのできるのは決してあらゆる民ではない。多くの人々は、一般に受け入れられている何らかの価値形態に満足できず、自らの個人的好みに合わせて、それを洗練しようと努める。おそらく、そのように洗練された形態の文化的価値は広い社会層にはなぜか受け入れ難いものとなるが、ある分野で支配的立場を占める一部集団の好みに適う。こうした場合には、その文化的価値は文化「上層」の貯蔵庫に入る。このようにして、「上層貯蔵庫」の文化価値は国民全体の支配集団自身によって創造されるか、あるいは、その支配集団のために常により繊細なニーズ、より要求の多い好みが適えられる。こうしたことから、上層文化は下層文化よりも常に比較的複雑で、あまり簡素ではない。一方では、上層文化の様々な創造の出発点は下層文化の何らかの価値でありうることで、他方では大衆自身が不断に自らの生活習慣の中に、上層貯蔵庫にある外来文化を簡便化して導入していることから、正常な文化においては上下層間に一定の交換と相互作用が常に存在すると言うことができる。この交換は、支配者が国民全体の固定集団でないために、時代と共に拡大する。ある集団が「支配者である」のは、「権威」を有している間のみ、つまり直接的意味での模倣、また敬意と服従の意味での「共感的模倣」を引き起こす力がある間のみである。しかし、時代の経過と共に「権威」は失われ、かつてはむしろ下層に属していた他の社会集団に権威が移る場合がある。そうした場合には、この新たな特権階級は文化建築の上層へ下層起源の多くの文化を持ち込むこととなる。

こうした上層と下層の内的な相互文化交換の他に、それぞれが外からの異文化借用によって活力を得ている場合もある。その際、上層が得ている外来起源文化と下層に補給される外来起源文化が合致せぬこともありうる。もしも、外来文化が民族全体の共通した精神気質に矛盾せず、摂取の際に有機的に吸収されていれば、上下文化層の自然な内的相互交換により、一定の合成作用が働く。だが、この作用が働かなければ、上層と下層の間に文化的断絶が生み出され、民族一体性が失われる。このことは、強い作用をもつ外来起源のものは当該民族気質にとってはなほ異質であることを常に裏付けているものである。

ロシア文化について考察する際には、上下層文化の民族性質を我々は真っ先にきちんと自覚し、我々の文化の一部と異民族文化との結びつきをはっきりと想像すべきである。

ロシア民族性を形成する基本的要素は、言うまでもなく、スラブ要素である。我々スラブ人の先祖の古い気質については言語データのみで一定の観念を抱くことが可能である。周知のように、すべてのスラブ諸言語の源である「スラブ共通祖語」は、子孫の諸言語を比較研究することで再建されつつある「印欧共通祖語」の子孫の一つである。現在では、この印欧祖語をある完全な同種のものに見なす考えはすでに放棄されている。この印欧祖語にはすでに方言差異が存在していて、しかもその差異は時の経過と共にますます大きくなり、それが祖語の決定的な崩壊をもたらし、個々の諸方言を自立的諸言語に変えた、ということについてはすべての言語学者の考えは一致している。スラブ共通祖語は印欧祖語の子孫であるということは、印欧祖語において時の経過と共に特殊な自立的言語となった特殊なスラブ祖語方言が存在していた、ということをも認めることである。印欧祖語の他の諸方言と異なった、あるいは類似していたスラブ祖語方言のこの特殊性は、学問によって再建が可能である。それこそが、我々がスラブ人先祖について知りうる最も古いことである。印欧祖語諸方言について我々が知るすべてのことによって確信できることは、スラブ祖語方言は最も近い親縁関係にあるバルト諸言語¹とともにある種の中間的位置を占めていた、ということである。南方でこの祖語方言に隣接していたのは、我々にはあまり知られていないイリュリア（訳者注：バルカン半島北西部地方の名称）諸方言、トラキア諸方言であった。東方でスラブ祖語方言に接していたのは、発音・文法・語彙の細目によって統合されるインド・イラン祖語諸方言グループであった。それ以外に、西方では、スラブ人は西欧祖語諸方言グループ（ゲルマン祖語、イタリア祖語²、ケルト祖語）と境を接していた。これら西欧祖語諸方言グループは、インド・イラン祖語諸方言に比べるとはるかに方言間の類似性が少なかったが、それでも発音・文法・語彙の一連の共通特徴により互いにまとまっていた。

スラブ祖語諸方言はその中間的位置のために、この印欧祖語の二方言グループの橋渡し役を時々演じつつ、ある特性ではインド・イラン祖語諸方言と類似し、別の特性では西欧祖語諸方言と類似していた。発音面では、スラブ祖語諸方言は、子音変化の一部共通性によってインド・イラン祖語方言と統合され、西欧祖語諸方言とは、おそらく、一部母音の発音の一定の音色のみで統合されていた。一般に子音は母音よりも聴覚を強く刺激するので、スラブ祖語の発音は、印欧語における発話の表面的な共通印象の中では、西方の発音よりもむしろ東方（インド・イラン祖語方言）の発音の方に似ていた、と考える必要がある。文法面では、スラブ祖語方言とインド・イラン祖語方言との特殊な類似関係は見られぬようである。しかし、西欧祖語方言グループとスラブ祖語方言は、一部の古い文法カテゴリー喪失の共通性により、

あるいは新形態創出よりも初期段階に存在した様々な形態の混交によって相互に結びついていた。概して、文法面ではスラブ祖語諸方言は最も近い親縁関係にあるバルト祖語諸方言とともにまったく特殊で独特なタイプをなしている。

隣接する言語あるいは方言間の関係を確定するには語彙研究が大きな意味を持っている。残念ながら、最も古い時代を扱うに際して、我々は個々の言語に元々ある単語と外来語を区別するための客観性を持ち合わせていない。それでも、元々ある単語より外来語の方の可能性が低いことが時々ある。スラブ人とインド・イラン人に共通だが他の印欧語（バルト諸言語は除く）にはない単語・語根リストを調べて見ると、次のような語があることを知る。前置詞として、スラブ諸言語の「къ (...の方へ)」、「ради (...のために)」、「безъ (...なしで)」、「съ (...と一緒に)」(前置詞、接頭辞として)、代名詞として「овъ (この、あの)」、「онъ (彼)」、「въсь (весь) (すべて)」、接続詞として「а (他方、だが)」、特殊な否定助詞「ни (ひとつも...ない) (比較せよ: 「ничь то 何も...ない」—アヴェスタ語の「naecit」)、副詞「яве (実際に)」、助詞「бо (さっさと)」などがある。これらはもちろん借用語というよりも元来固有の語である。スラブ祖語方言とバルト祖語方言は各言語にきわめて特徴的かつ重要な付属語分野で、他の印欧祖語諸方言のいずれともこうした仔細な類似性を示すことがない。このことは、スラブ祖語諸方言とインド・イラン祖語諸方言の特に緊密な結びつきを推測させる。この二つの方言グループに共通な他の語彙要素の中には、特有の意味内容を考えれば、一方の方言が他の方言から容易に借用した可能性のある多くの単語がある。そうした語彙はきわめて特徴的である。それら語彙の中の一連のものは宗教用語である。そうした用語の例としてふつう引用されるのは（フランス人学者メイエに倣って）スラブ語の「богъ (神)」、「святъ (聖なる)」（яは鼻母音 е）、「слово (ことば)」があり、それらは古代イラン諸言語の「baga」、「spenda」、「sravahv」と対応関係を持っている。この点でまさにスラブ語とイラン語の対応関係があることは、際立っている（インド語が関与しない。バルト諸言語には3単語のうち2単語しかない）。ここで思い起こしておく必要があるのは、印欧語の単語「deiws」は他のすべての言語で「богъ」（ラテン語「deus」、古代インド語「devas」、古代アイスランド語「tyr」、複数「tiwar」）の意味を持つが、スラブ語とイラン語では神話上邪悪な存在を意味している点である。アヴェスタでは「daevo」、新ペルシャ語で「dev」、古代ロシア語では「дивъ (悪魔)」(『イーゴリ軍記』)、南スラブ語で「дива, ведьма (魔女)」、「самодива」、さらに「дивий (野蛮な)」、「дивъ (残忍な)」が邪悪を意味する語である。イラン人の間ではこの意味変更はゾロアスター改革によるものと一般に説明されている。ゾロアスターはアフラ・マズダ（オルマズド）を真の唯一神と認め、他のすべての神々をデーモンとした。そ

こで、「daevo」という語は「デーモン」の意味を持ち、「богъ」は他の単語（「baga」も含めて）によって表されるようになった。スラブ人の先祖は、東の隣人イラン人先祖のところで結局ゾロアスター改革をもたらすこととなった信仰概念の発展に何かしら関与した、と考える必要がある。

こうした状況において、スラブ語の動詞「верити（信じる）」とアヴェスタ語で同じく「信じる」を意味するが、第一義は「выбирать（選択する）」を意味する「varavaiti」との対応関係についてのメリエの推測は十分妥当性がある。なぜなら、ゾロアスターの教えでは、真の信仰者は善の神（オルマズド）と邪悪の神（アリマン）の間の正しい「выбор（選択）」をなしたものとされるからである。スラブ祖語方言とインド・イラン祖語方言の宗教用語のかような類似がある中で、両方言の他の語彙のいくつかの特別な類似性も目立った説明がされている。例えばスラブ語の「зовѣтъ, зъвати（呼ぶ）」はバルト諸言語のほかにインド・イラン語のみで対応語を持つが、インド・イラン語では「神を呼び出す」という専門的意味で特殊に使われる、ことが知られている。スラブ語の「сѣдрав（健康）」は古代ペルシャ語においてのみある程度正確な対応語を持っている—健康については最も頻繁に祈願がなされることを思い起こしておこう。スラブ語の「боятися（恐れる）」はリトワ語の外には古代インド語でのみ対応語に出会う。宗教用語の全体的脈絡の中にはこの語も容易に収まる。スラブ語の「шуй（左の）」は、インド・イラン諸言語でのみ類似語を持つことを考え合わせると興味深い推測が生まれる—左側に対する迷信的態度は、恐怖概念を特殊単語（いわゆるタブー）で表す習慣とまったく同じく、良く知られているものである。スラブ祖語方言語彙とインド・イラン祖語方言の特殊な重なり合いが見られる中で、とにかく宗教上の習慣と結びついた用語がたいへん目立った割合をなす、と概して言うことができる。

まったく異なった性質を持っているのはスラブ祖語方言と西欧祖語方言との特殊な一致である。そうした一致は、インド・イラン祖語方言との間におけるよりもたぶん多いであろうが、そうしたものの中には、まず接統詞、前置詞など日常の言語生活で重要な役を演じている馴染の単語がない。経済生活に関係する単語で専門的な意味内容を持つ語彙がまったく圧倒的である。名詞では以下の語がある—「семя（種子）」、「зръно（穀粒）」、「брашно（食物）」、「леха（畝）」、「яблъко（リンゴ）」、「прася（豚・犬など一腹の子）」、「поросенок（子豚）」、「бобъ（豆）」、「секыра（斧）」、「шило（大針）」、「трудъ（労働）」。動詞では—「сеяти（蒔く）」、「ковати（鍛造する）」、「плести（編む）」、「слещи（切る、刻む）」がバルト語以外ではケルト語、イタリア語、ゲルマン語のみで正確な対応語を持っている。形容詞「добрь（善良な）」（ヨーロッパ諸言語の「dhabros」に起源を持つドイツ語「tapfer」、ラテン

語「faber」)は元々道徳的意味は持たず、純粹に専門的美徳——一定の作業に対する器用さ、適応性を意味していた。古い社会生活習慣の雰囲気を与え、スラブ人、イタリア人、ゲルマン人にのみ知られている単語として「г о с т ь (客)」(ドイツ語のGast、ラテン語の hostis)、「м е н а (交換)」、「д л ъ г ъ (借金)」がある。そして、「д е л ь (分割する)」は、おそらくゲルマン諸言語 (ドイツ語の「teit」)でのみ正確な対応語を持っている。スラブ人と西方印欧語人の間でのみ対応関係がある残りの単語は特徴が乏しい。なぜなら、それらは自然界の事物を表すものであり、その共通性は同じ地理条件によって説明される語 (「м о р е (海)」,「м ѣ х ѣ (コケ)」,「д р о з д ѣ (ツグミ)」,「о с а (スズメバチ)」,「с р ы ш е н ь (クマンバチ)」,「е л ь х а (ハンノキ)」,「и в а (ヤナギ)」,「с е в е р ь (北)」)、あるいは身体部位名称である (「л я д в е я (太もも)」,「б р а д а (あごひげ)」)。これら両カテゴリー単語はスラブとインド・イランの対応語一覧にも見られる(スラブ語「г о р а (山)」に対して、アヴェスタの「gairi」、古代インド語の「giri」; スラブ語「г р и в а (たて髪)」,「у с т а (口)」,「в л а с ь (髪)」に対して、古代インド語の「griva (首)」,「oshtha (口)」,アヴェスタ語の「varesa」が対応する)。

スラブ祖語諸方言は東方と西方との関係以外にも南方のトラキア祖語諸方言、イリュリア祖語諸方言 (この方言からアルバニア語が形成された) との特別な関係を持っていたことは、確実と思われる。残念ながら、現在までわれわれに伝わっているアルバニア語は著しい混合言語であり、少し残っているだけの土着の語彙に対し他言語要素 (ロマンス、ギリシャ、トルコ、新スラブ諸言語) の方がまったく圧倒的である。古代トラキア人とイリュリア人の諸言語はわれわれにはほとんど何も明らかになっていない。そこで、スラブ祖語諸方言とその南方隣人との交流特徴について我々は何一つ明確なことは知らないのである。

インド・ヨーロッパ時代の末期までに、つまりスラブ祖語方言が自立言語として分離する頃までに、スラブ人は東方と南方と西方との交流をどうするかについて選択を行うことになった。我々が見てきたように、スラブ人は「心」はインド・イラン人に惹かれたが、「身体」は地理的および物的生活環境によって西方のインド・ヨーロッパ人に惹かれた。スラブ共通祖語が最終的に印欧語族の他の語派から自立した後の初期に、スラブ人先祖はすでにゲルマン、ケート、イタリア (後のロマンス) の三語派に分かれていた西方のインド・ヨーロッパ人から強い影響をかなり長い間受け続けていた。スラブ共通祖語に入った古代ゲルマン語とロマンス語の要素は、その意味カテゴリーからすると、スラブ祖語諸方言と西欧祖語諸方言にかつて存在した共通語彙要素と何ら変わるところがなかった。それは主に経済の対象物、商業と国の生活様式に関する用語、そして武器名称であった。後に、これらの語に加えてキリスト教の宗教用語が、初期にはかなり回り道をして — ギリシャ人とローマ人からゲルマン人

（教会、精進）あるいはロマンス人を通じて（十字架）—さらに後には直接ギリシャ人からスラブ人に伝わった。

最後に、スラブ共通の統合時代が終わり、スラブ人は細かな西、南、東のグループに分かれ、それぞれが別の目標に向けての歩みを踏み出す。

このようにして、スラブの文化的特徴は、スラブ人の先祖が全てのインド・ヨーロッパ人の一部にすぎず、印欧共通祖語の一方言を話していた当初からあらかじめ定められていた。すでにその当時からインド・ヨーロッパ諸族の中で占める中間的位置により、東方や、西方や、南方との結びつき志向が生じていた。後に、これらの志向はスラブ人自身の分化と結びついて細分化し、結果として、スラブ人の各派がこれら志向の一つを維持した。

西スラブ人はローマ・ゲルマン世界に接していた。もっとも、その世界は西スラブ人を自分たちと平等な権利がある家族メンバーと見なしてはいなかった。西スラブ人はドイツ化と撲滅を蒙った。かつて、西スラブ人はエルベ川とフルダ川に至る現ドイツ領の東半分全体を占めていた。ところが現在では、西スラブ人が入植していたうちのポーランド領、チェコ領、そしてドイツ人に囲まれたソルブ人の小さな島が残っただけである。それでも、ローマ・ゲルマン世界での西スラブ人のこうした嫌な立場にもかかわらず、そして全く同等の仲間と見なされていないにもかかわらず、西スラブ人はかなり有機的にローマ・ゲルマン文化を摂取し、力に応じてその文化発展に関与してきた。ローマ・ゲルマン世界のいわゆる新歴史の端緒を示す知的変革をかなりな程度促進したのは二人の西スラブ人—チェコ人ヤン・フスとポーランド人ニコライ・コペルニクスの活動であった。

南スラブ人はビザンチン帝国の影響圏に入り、バルカン半島の他の諸族と共に独特なバルカン文化の形成に参加した。その文化の上層はヘレニズム文化であるが、下層はその文化を創造した個別民族要素の役割が今日でもまだ十分に研究されていないため、詳しい民族学的定義はなされていない。ビザンチン精神文化の摂取はここでも有機的に進んでいた、少なくとも南スラブ人のこの有機的文化摂取と自由な協力関係を従属下に置こうとするギリシャ人特権階級（オスマン帝国時代のこと）による排他的陰謀が始まるまでは順調であった。

東スラブ人にある文化志向においては、明確な意思が極めて乏しかった。東スラブ人は、インド・ヨーロッパ文化のどの源とも直接接触していなかった³ので、主にスラブ人の仲介を経て、西方南方との近づき関係を持ちつつ、ローマ・ゲルマン＝西方がビザンチン帝国かを自由に選択可能であった。選択はビザンチンに向けられ、当初は非常によい結果をもたらした。ロシアの大地でビザンチン文化は発展し華やかになった。ビザンチンから受容したものは、全て有機的に吸収され、民族精神の要求にそれらの要素全てを適応させる創作活動のための手本となった。それはとりわけ精神文化の領域、芸術および宗教生活にあてはまる。逆に、

西方から受容したものはすべて一有機的に吸収されず、民族の創造活動を促進しなかった。西方の商品は輸入され、購入されたものの、再生産はされなかった。職人が呼び寄せられたが、それはロシア人に職を教えるためではなく、注文をこなすためであった。時に、書物の翻訳がなされたものの、それが民族文学をしかるべく育て上げることはなかった。我々はもちろん、詳細についてではなく、一般的特徴のみに言及しているのである。一般原則から外れているものは、むろんたいへん多かった、しかし、概してビザンチンのものはすべて、疑いなく西欧のものすべてに比べてロシアでは容易に有機的に吸収された。これらすべてを迷信にとらわれた忌新症のみで説明しようとするのは不当である。この迷信そのもののの中にローマ・ゲルマン精神に対する本能的な反発感があり、彼らの精神で創造する場合の無能さの自覚があった。この点で、東スラブ人は自らの先史時代の疑いない子孫であった一印欧祖語スラブ祖語方言の担い手であった先祖は、語彙研究の示すところによると、西方インド・ヨーロッパ人への精神的親しさを覚え、精神面では東洋を目標にしていた。西スラブ人にあってはその精神特徴はゲルマン人との長い直接交流のせいで抑えられたが、東スラブ人にあっては、おそらく、部分的にフィン・ウゴル系民族やチュルク系民族との人種混合のせいでこの特徴が顕著になった。

こうした事態はピョートル大帝の改革で激変した。このとき以降ロシア人は、ローマ・ゲルマン精神に浸り、その精神で創造しなければならなくなった。前述のことから明らかなように、課題の性急な遂行にはロシア人は生まれつき能力がなかったのである。まさしく、ピョートル大帝以前のロシアはその文化面では最も才能ある多産なビザンチンの継承者であるとはほぼ見なすことができるとすれば、ローマ・ゲルマン志向の道に踏み込んだピョートル大帝以降のロシアはヨーロッパ文化の最後尾、文明の僻地に置かれている。ヨーロッパ精神文化の原動力となっている一部基本的要素（例えば、ヨーロッパの権利意識）のロシア上層社会による受容程度は低いが、大衆にはまったく受容されていない。ローマ・ゲルマン人にとっては最重要な一部の精神的能力の欠如を絶えず感じさせられた。それゆえに、「ヨーロッパ文明の宝庫」へのロシア人天才による実際の貢献者数はロシアの大地に絶えず無意識に移植されている外国文化の多さと比較すると微々たるものだ。ローマ・ゲルマン文化の有機的摂取の試み、ロシアにおけるヨーロッパ風な独自の個人的創造力の発揮の試みは、特に精神文化面で一再ならず行われた。ところが、ロシアのみでなく西欧にも受け入れられるヨーロッパ風文化の創造に成功したのはもっぱら天才的個人のみであった、そして、明らかに、圧倒的の大部分は単純でほとんど機械的な借用と模倣によるものが常であった。何らかの才能あるロシア人、あるいはロシアの天才が、ヨーロッパ文化の範囲内で、何らかの民族的独自性を生み出す努力をした場合には、自らの創作の中にローマ・ゲルマン世界には異質なビザンチン

要素、ロシア的あるいは東洋的（特に音楽において）要素を大部分導入していたことを、指摘しておかねばならない。このために、真のローマ・ゲルマン人はロシア人の創作を遠くから鑑賞することはできるものの融合や体験はしないエキゾチックなものとして受けとめている。同時にまた、真の独自性の点からすれば、このような混合文化はやはり十分には受け入れられぬものである、そこで敏感なロシア人はいつもその文化に欺瞞を感じている。この欺瞞は、一部はロシア的要素の間違った認識、一部は形式と内容の不一致が原因である。

結局のところ、ロシアインテリゲンチヤ（広義で）のあらゆる努力にもかかわらず、ピョートル大帝によって掘られた二つの溝—ひとつはピョートル以前のルーシとピョートル以降のロシア国家、もうひとつは民衆と知識人社会層のもの—これらが現在まで埋められぬままで、口を開けたままである。思いやりのある偉大な芸術家でさえ、この溝に橋を架け渡すことができなかった、リムスキー・コルサコフの音楽もやはり真のロシアの歌とは基本的に異なっているし、同様に、ヴァスネツツォフとネスティエロフの絵画は真のロシアアイコン画とは異なっている。

ロシア文化建築物の上層階はこのような事情である。ロシア文化の上層は、最初はビザンチンから、後にはローマ・ゲルマン中心の西欧から借用した文化的伝統を多かれ少なかれ有機的に吸収しつつ、常にそうした伝統によって生きてきた。確かに、上層によって摂取された異国の伝統が下層の民衆にも浸透した。とりわけ民衆に強く浸透したのは民衆のあらゆる精神生活を一定の色調に染めたビザンチンの伝統、東方正教会の伝統であった、だが、この東方正教会はロシア民衆の本源に接触することで変容したので、ビザンチンの特有な伝統特徴は著しく色あせたものとなった。西欧文化は民衆の心に深く作用せず、民衆への浸透ははるかに弱かった。そこでローマ・ゲルマン文化の借用は、ロシア文化建築の上層と下層のあいだに、上層がビザンチン文化を摂取した際には存在しなかった原則的不調和を引き起こした。しかし、ビザンチンとローマ・ゲルマンの伝統によってロシア民衆の本源である文化的または民族的性格が汲みつくされるわけではない。ロシア知識人社会で広まっているのは、この性格の独自特徴は「スラブ的」なものである、との確信である。これは正しくない。（ある社会の物質的精神的要求を満足させる）文化的価値総体の意味での文化—ロシア民衆が常にそれによって生きてきた文化は—民族的視点からすれば、何らかのより大きな文化グループまたは文化圏に何もかもすっかり入れてしまうことはできないほどの著しい大きさである。概して、この文化はまさに特別ゾーンであり、そこにはロシア人のほかにボルガ域のチュルク人とともにさらにフィン・ウゴル「異族」が属している。この文化は東方と南東へ行くにつれて徐々に「ステップ」文化（チュルク・モンゴル）と接触し、その文化を経てアジア文化と結びついている。西方でも、ローマ・ゲルマン文化とバルカン文化に接触している西ス

ラブ人文化への漸次的移行（ベラルシア人と小ロシア人^{（訳者注1）}を経て）が見られる。しかし、このスラブ文化との関係はもはやそれほど強くなく、東洋との強い関係によって釣合いがとれている。一連の問題によってロシア民衆文化はまさに東洋に接しており、それで東洋と西洋の境界線がまさにロシア人とスラブ人の間を時々走る。また時に南スラブ人とロシア人が類似するのは、両者がスラブ人だからではなく、両者がチュルクの強い影響を体験したためである。

このロシア要素の特性は民衆の芸術創作物に明確に反映している。大ロシア人^{（訳者注2）}の歌（古い起源の歌、儀礼歌、婚礼歌）の多くが5音階あるいはインドシナ音階でできている、つまりあたかも長調階で4段と7段の音を抜いたごときものである⁴。この音階（唯一のものとして）は、ボルガ川とカマ川地域のチュルク族、さらにバシキール人、シベリア・タタール、東西トルケスタンのチュルク族、すべてのモンゴル族において存在する。この音階はかつて中国にもあったらしい。少なくとも、中国の音楽理論はその存在を前提としていて、中国で採用されている記譜法はそれに基づいている⁵。シャム、ビルマ、カンボジア、インドシナではこの音階が今でも支配的である。というわけで、当該ケースでは我々は東洋から伸びる連続線に連なっている。大ロシア人のところでこの線は中断している。小ロシア人のところでは5音階は非常にまれに古い歌でのみ見られ、他のスラブ人のところでは個別例外的ケースとして見られるだけであり、ローマ人とゲルマン人のもとではこの音階はまったくなく、北西ヨーロッパの端、イギリスのケルト人（スコットランド人、アイルランド人、ブルターニュ人）のところでこの音階は再び現れる。リズム面では、ロシアの歌はローマ・ゲルマンのみでなくスラブの歌とも本質的に異なっている、例えば（ワルツやマズルカの）3拍子リズムがまったく欠如していることからそれが分かる。ロシアの歌がアジアと区別される点は、アジア人の大部分は声を合わせて歌う（斉唱する）ことである。だが、この面では、ロシアの歌は過渡的位置にある。ロシアの合唱の和声法はポリフォニー（複旋律）であり、斉唱は珍しくないものの、合唱の一定のカテゴリーでは独唱者すら必要となる。

このような独自性は、他のリズム芸術であるダンスにおいても見られる。ローマ・ゲルマンのダンスは、同時に踊りながら、互いにつかまり合っている男性と女性のカップルの存在が必要であるのが特徴であり、このことから足だけによるリズム運動を行うことが可能となり、その際、男性も女性も同様の運動となる。ロシアダンスではこれに似たものは何もない。カップルは不可欠ではない、それにたとえ二人が踊っている場合でも、二人は必ずしも異性であるとは限らない、同時でなく順番に、いずれにしても互いにつかまり合わずに踊ることがある。このことからリズム運動は足だけでなく、手や肩によって行われうる。男性の足の動きは、女性とは異なり、かかととつま先の踏替えが特徴である。頭を静止して動かさぬ傾向が、特

に女性に目立つ。男性の動きは前もってはっきりと決められておらず一定のリズム内での即興に大きな裁量が認められている。女性の動きは様式化した足どりが特徴である。踊りのメロディは短い楽句であり、そのリズムは区切りがかなり明確であるが、バリエーションを生む大きな自由裁量が許されている。こうしたすべての特性は東フィン族、チュルク族、モンゴル族、カフカス族（ただし、北カフカスにはカップルが互いにつかまり合って踊るダンスもある）、および多くの他のアジア人に見られるものである⁶。ローマ・ゲルマン人のダンスはダンス自体の技術は乏しいながら、男性が常に女性パートナーの身体に触れていることから一定の性的特徴を入り込ませる、これとは異なってロシア的アジア的のダンスは身体の軽快さとリズムミカルな技能の競合いの性格を持っている。見物人が反射的に足拍子を取り、口笛や叫び声を発して関与することでリズム感がさらに高められる。

ヨーロッパでは、スペイン人にのみこれに類似したものがある、おそらくそれは彼らにも東洋の影響（モリタニア人とジプシー）があることによって説明されるであろう。スラブ人はと言うと、彼らは舞踏芸術面ではロシアにつながっていない。ただし、ブルガリアのルチェニツァ（訳者注³）はある程度までロシア・アジア型を再現しているが、疑いなく東洋の影響を受けている。

装飾文様（彫刻模様、刺繍模様）の分野では、大ロシア民衆文化は独自スタイルをもっている。その様式は小ロシア人を經由してバルカン半島と結びつき、フィン・ウゴル人を經由して東洋と結びついている。この分野ではかなり複雑で交錯する影響があったようである、それは学術的分析によりさらなる解明が予定されている。残念ながら文様についての学問は今なお萌芽状態を脱しておらず、様々な模様における相互間の客観的親縁関係を立証しうるための何らかの合理的な分類法を考案していない。そこで、ロシアと西スラブ、ローマ・ゲルマンの文様の違いはいずれにしてもかなり明らかに感じられるものの、どこに相違があるのかを確定するのは不可能である。

民衆文学の分野では、大ロシア人はまったく独創的である。ロシア民話の文体はローマ・ゲルマン人やスラブ人には類例がない、その代わりにチュルク族とカフカス族には類似したものがある。東フィン人の民話は、文体面ではまったくロシアの影響を受けている。ロシアの英雄叙事詩は筋書きでは、東洋トウランとも、ビザンチン帝国とも、また一部はローマ・ゲルマン世界とも結びつきを持っている。だが、表現形式はまったく独創的で、いずれにしても、西方のいかなる特徴もない。表現形式では、バルカンのスラブ人とはかなり結びつきがかなり弱く、ステップの汗国英雄叙事詩と結びつきがかなり強いことだけは言える。

ロシア民族の物質文化は、もちろんステップ遊牧民の文化とは非常に異なっており、むしろ西スラブおよび南スラブの文化と結びつきがある、ということだけは言える。しかし一つ

だけはそれでも確実である、それは物質文化面では大部分のフィン諸民族（遊牧と放浪の民族は別として）は大ロシア人とあたかも不可分の一体を成す、ということである。残念ながら、ロシア人の物的生活様式についての個々の特徴に関する詳細な民族誌研究はこれまでのところ非常に少なかった。好事家的な研究が多かった。我々の恥であるが、フィン異族（訳者注4）の物質文化は、特にフィンランド民族学者の努力のおかげでずいぶん良く研究されていることを、認めなければならない。ロシア・フィンと名付けうる文化タイプ形成に関してウグル・フィン及び東スラブの諸要素の役割は不十分には解明されていない。漁業技術ではウグル・フィン人が、住居建設では東スラブ人が影響力を発揮する立場であった、と一般に考えられている。ロシア・フィン人の衣装では、いくつかの独特な共通特徴があり（樹皮製の履物、ルバシカ（訳者注5）、女性用帽子）、それらはローマ・ゲルマン人やスラブ人にはなじみがないものである（樹皮製の靴はリトワ人には存在する）。だが、全てのこうした要素の起源は今もなお十分に解明されたと考えることはできない。

そういうわけで、民族的な面ではロシア人はスラブ人の典型的代表ではない。ロシア人はウグル・フィン人およびボルガのチュルク人とともに特殊文化圏を形成している。この文化圏はスラブ人とも、東洋トウラン人とも結びつきを持っているが、それらのうちのいずれの結付の方がしっかりしていて強いのかを言うのは難しい。ロシア人とトウラン人との結付きは民族的側面のみでなく人類的側面でも強い。なぜなら、ロシア人の血管には、スラブとウグル・フィンのほかに、疑いなくチュルクの血が流れているからである。ロシア人の民族特徴には、もちろん、東洋トウランとのある種の共通点が存在する。我々とこのアジア人との間で容易に友好関係と相互理解が成り立つのは、この目に見えぬ人種的共感の絆に基づいている。もっとも、ロシア人の民族特徴はウグル・フィン人ともチュルク人ともかなり大きく異なっているものの、同時にまた他のスラブ人の民族特徴にもまったく似ていない。ロシア人が自らの内面について高く評価している一連の特徴は、スラブ人の特徴の中にはまったくいかなる等価物もない。ロシア人の敬神を特徴付けている瞑想的気性及び儀礼尊重は形の上ではビザンチンの伝統に基づいているものの、それでも他スラブ人正教徒にはまったく無縁であり、むしろロシアを非正教の東洋と結び付けている。ロシア人が高く評価する英雄の大胆な勇敢さはチュルク人には理解される純粋にステップの徳であるが、ローマ・ゲルマン人やスラブ人には不可解なものである。

ロシア人の基本要素をなす精神的及び民族的気質の独自性は新たなロシア文化のいかなる建設をする際にも考慮すべきである。なぜならこの基本要素はロシア文化建築の下層たるべき使命をおびているからである、それにこの建物が強固であるためには建物の上層が下層に合致していなければならない、上層と下層の間に基本的なずれとゆがみがあってはならない。

ロシアの文化建物がビザンチンの丸屋根で仕上げがなされていた時は、ある種の安定性があった。だが、この丸屋根がローマ・ゲルマン構造の上層に取り替えられた時から、建物のいっさいの安定性と各部分の均斉が失われ、上層はますます傾き始めてついに崩れ落ちた、ところで我々ロシア人インテリは、ロシアの壁に適應しないローマ・ゲルマン製の屋根が崩れ落ちぬよう支えるために多大な労力を費やしてきたのであるが、この巨大な廃墟を目の前にして驚愕したまま立ちすくみ、また新たな屋根を、またしても同じローマ・ゲルマン様式のものを何とか建築しなければならない、と考えている。この計画は断固拒否すべきである。ロシア文化の上層が、いずれにしても、ロシアの大地でしっかり安定したものになるためには特にローマ・ゲルマンのものであってはならない。ビザンチンの伝統へ戻るのはむしろ不可能である。確かに、ビザンチンの伝統が「欧化」によって完全に排除されなかったロシア的生活の唯一の片隅—ロシア文化建築の一部としてのロシア正教会は驚くほど生命力が強く、一般的な崩壊の際にも倒れぬだけでなく、ビザンチンから継承したモデルをもとに新たに再建し、再びその昔の形を取り戻した。将来的にはロシア文化のビザンチン要素は、教会の伝統に立脚しつつ、おそらく大きくもなるであろう。しかし純粋な形態の古いビザンチン基盤の上にロシア的生活様式を完全に再建することを考えるのは、もちろん不可能である。2世紀半の激しい欧化がロシアから跡形なく消え去らぬからだけでなく、ニコン総主教がロシア的生活様式の中のビザンチン要素を拡大し、ロシア的敬虔をビザンチン様式に近づけようと決めた17世紀にさえ、このビザンチン様式はロシア人のかなりの部分によって外国のものとしてすでに受け取られ、教会の分裂を引き起こした。後に、その分離派^(訳者注6)は自らの抗議の刃を欧化に向けた。それ以来、ロシア分離派にはロシア民族要素の独自文化志向が見られる、ただしその志向は下層文化をもつが上層文化を持たぬ結果、おそらく誤った道を歩み、あらかじめ失敗の運命を定められていたようである。しかし、分離派の道にはそれでも基本要素の上に人工的に被せた異質な文化上層に抗議するロシア的要素の健全な民族本能の発露が感じられる。そこで、エミリヤン・プガチョフが「邪教のカトリック教徒とルーテル派信徒」を否定する古儀式派^(訳者注7)の旗の下に馳せ参じていながら、バシキール人や他の非正教徒のみでなく異教の東洋トウラン人と団結することについてすら何ら悪びれる様子がなかったことは、実に意味深長である。

このロシア人の基本資質の本能的共感と反感の中にこそ、ロシア文化建物を建築するための支持を得る必要がある。我々は東方正教を信仰している、そしてこの正教は我々の民族精神の独自性とあいまって、ロシア的生活様式の多くの側面に影響を与えつつ、我々の文化の中で指導的立場を占めるべきである。信仰と一緒に我々はビザンチン帝国から多くの文化的伝統を受容した、かつてはそれらを独創的に発展させ、我々ロシア人に適應させてきたものだ。

この面の活動が継続してほしいと願う。だが、事がすむわけではない。全てをビザンチンの枠内に詰め込むことは不可能である。我々はビザンチン人ではなくロシア人である、ロシア文化が完全に我々のものとなるためには、その文化がロシア人の基本資質の中にある独自の精神的民族的気質とより緊密に結びついている必要がある。そしてここではこの気質の特殊な独自性を考慮に入れておく必要がある。ロシアの歴史的使命は我々スラブ人兄弟を団結させることである、とのことが多く述べられてきた。そうした場合、スラブ諸族だけでなくトウラン諸族も我々の「兄弟」であり、事実上ロシア国家機構の下にトウラン東洋のかなりな部分をすでに統合してきたことは、忘れられがちであった。これら「異民族」をキリスト教化する努力はこれまでほとんど成功していない。従って、ロシア上層文化がロシア的基本資質の民俗圏の特殊状況と合致するためには、ロシア文化は東方正教に留まることなく、ロシアナロードの運命と歴史的に結びついている様々な種族を一つの文化的総体に結束させる基本的なナロード資質の特質を示す必要がある。それは、草鞋と5和音の音階が必ずやロシア文化上層の固有の特質となるべきであると言うことを意味するものでは毛頭ない。出現しつつある新たなロシア文化の具体的形態を予言し指示することは全く不可能である。だが、それでも上層と下層の差異は二つの異なった民俗圏への愛着によってではなく文化的完成の程度や共通文化要素の詳細な検討の程度によって立場の確定がなされるべきである。文化的建築の総仕上げとしての意味でのロシア文化は本質的にロシア的基本資質をもとに育つべきである。

「バベルの塔と言語混乱」

聖書はアダムとイブによる人類最初の罪に対する罰のほかに、全人類による集団的墮落に対するさらに第二の罪、つまり、バベルの塔建設に対する罪としての言語の混乱について述べている。

言語の混乱、つまり言語と文化の多数性の定めは聖書では神の呪いとしての罰として描かれており、それは「額に汗して働く」呪いがかつてアダムに負わされたのと同様である。何れの呪いも自然法則の具現化として現れている、その法則に背けば人類は無力である。人間の肉体的本性とすべての自然環境は、食料獲得と肉体労働とが結びつくように仕組まれている。諸民族発展の法則は、言語と文化の領域における諸民族間の差異の発生と維持を必然的に伴うように仕組まれている。人間が肉体労働を減らすために機械をいくら発明しても、この労働を完全になくすることは決してできないであろう。そして、人々が民族的差異の多さにくら逆らおうとしても、その差異は常に存在するであろう。だが、それどころか、肉体労働は身体の正常な働きと密接に結びついているので、その完全な欠如は健康に害とある。日々の糧を得るために肉体労働をする必要がない人々は健康保持のため、一定の手作業の代わりに人工的に体操、スポーツ、散歩などをせざるを得ない。それとまったく同様に、言語と文化の細分化は社会組織の本質と有機的に結びついており、民族的多様性を一掃しようとすることは文化的貧困と滅亡を招くであろう。

純粋な形の労働そのものは決して心地よいものではない。心地よいのは労働に付随する感覚と気分、自己が持つ力と敏捷性の知覚、仕事の結果への興味、競争意識、休息への期待感などである。こうした副次感覚と気分が少なくなるにつれて、苦しみとしての労働の本質がはつきりと現れる。労働を懲罰とする必要がある場合には、これを装飾してその本性を隠すような全てのことは排除される―苦役こそ純粋な形の労働だ。特別な情けの形で、神は一部の者に肉体的な力、あるいは仕事での大成功をお授けになっている。しかし、神からのこの賜物のおかげで労働が魅力的になるのは、労働者がそれを賜物と認識し、嬉しがる場合のみであり、労働そのものは労働のまま、つまり苦しみそのまま留まっている。

このように、労働そのものは常に苦悩であり、労働必要性の原理は人間の原罪に対する神の永遠の呪い、苦役のままである。逆に、民族文化の細分化と多数性の原理はそれ自体いかなる苦しみとも結びついていないわけではない。この原理は多くの人々の意図と理想の実現にとって障害となり、しばしば戦争や民族的敵意やある民族による他民族迫害を引き起こしている、だが、この原理自体は苦しみと結びついていない。民族文化の細分化・多数性原理と肉体労働必須性原理との差異は、労働は人類の最初の罪に課せられた苦役そのものであるが、聖書

によると、細分化の原理は懲罰というよりもバベルの混乱に対する神の回答であり、将来においてバベルの塔建設に類した試みを防止する目的を持った神の決定であることに関係している。

バベルの混乱についての聖書の記述の歴史的裏面の問題からはまったく逸脱するものの、この記述に深い内的意味を認めるべきである。この記述において聖書は、同一言語で話す人類、つまり言語的及び文化的にまったく同質の人類を我々に描き出して見せる。この単一の人類共通の、何ら個別民族的特徴を何ら持たぬ文化は極めて一面的なものであることがわかる—学問と技術の大発展にもかかわらず（それは建築構想の可能性が示している）、精神的な空っぽさ、道徳的な退廃が見られる。この文化特性のせいで、独りよがり我慢が途方もなく増長し、その現われが罰当たりで愚かなバベルの塔建設の意図となっている。バベルの塔は技術の極致であるが、宗教的内容が無いだけでなく、神を恐れぬ冒瀆的使命を含み持つ。そこで、神はこの建設意図遂行を妨げ、人類による神冒瀆の慢心に終止符を打つことを願って、諸言語を混乱させた。つまり、民族細分化と民族言語・民族文化多様性の原理を恒久的に定めた。この神の摂理に含まれるのは、一方では、バベルの塔建設意図で明白にあらわれている神を恐れぬ自画自賛の技術は偶然の産物ではなく、画一的で民族的分化が見られない人類共通文化であるがために、必然的かつ自然な帰結であることの告知である。他方では、民族的に限定された文化のみが人類の傲慢な精神にとらわれぬものであり、神の意に沿った道で人類を導くことが可能である事の指摘である。

摩天楼建設と単一の全人類的文化概念との内的結びつきは明白である。過去の世代と現代の世代の共同の創造活動の結果としてのあらゆる文化は時代とともに絶えず変化している。そして、個々の文化財は、当該社会全体あるいは社会成員の一定の（物的精神的）要求を満足させる役目を持つ。このため、あらゆる文化は当該社会総体の枠内で、その成員の個別的差異を無くし、均質化しようとする。一般に広く認められている文化財においては、創造者の極端な個別の特徴、あまりに個別的な一部メンバーの要求と好みの特徴は目立たぬものとなる。それは、異なる極にあり、最大限異なる個別的差異の相互中和作用によって自然に生じるものである。結果として、当該社会メンバーにとって一種平均的な精神タイプの痕跡が文化全体に刻まれる。社会メンバーの個別的差異が大きくなれば、文化において具体化される平均的精神タイプはますます不明確で没個性的なものとなる。もしも、全人類が創造者であり担い手であるような文化を思い浮かべるとすれば、そうした文化における没個性と不明確さがこの上ないことは明白であろう。このような文化では全ての人々に共通な精神要素のみが具体的な形となって現れるはずである。全ての人の好みと信念は様々であり、その個人的変動は極めて著しい—しかし、全ての人の論理は同じである、全ての人の食事の欲求、労

働節約の欲求は程度に差はあるものの等しい。そこで、均質的な人類共通文化においては論理、合理科学、物的技術の方が宗教、倫理、芸術性よりも常に優勢になること、こうした文化では集約的な科学技術発展が精神的道徳的荒廃と必然的に結びつくようになること、は明らかである。高尚さのない論理と物的技術は精神的に野生化した人間をやつれさせる、同時にまた真の自己認識への歩みを軽減せぬだけでなく困難なものとする、そして慢心を増長させる。従って、単一の人類共通文化は神を無視した、背信的で混乱した性格を必ず持つ。

逆に、民族的に限定された文化では、プライベートな精神的要求と精神的気質、美的好み、道徳的志など全てのものが一つまり、当該民族のすべての道徳的精神的独自特徴が一尊重されている。この文化の精神面はすべて特色のある民族心理に満たされており、本能的にその文化の担い手にとって身近なものである。類似した同種の人々の精神的気質、精神的体験を文化において具象化することにより、当該民族の個々人にとって個人的自己認識が容易になっている。そこで、このためにまさに民族文化の枠内でのみ道徳的に好ましい、精神的に人を高める価値が出現し得るのである。民族文化のプラス面を理解しながらも、それでも、一定の有機的限界を越える民族細分化には否定的に対処すべきである。民族細分化は決して民族文化の無秩序な分散と同義ではないこと、細分化は無限の細分化ではないこと、こうしたことは、民族細分化のマイナス面を検討して見れば、まさにそのようにまざまざと感じられることを極力強調する必要がある。

民族文化多様性の原理は人を束縛する。人の思考は、思考そのものの特別な性質のため、つまり時間の隔たりを克服できにくいこと、カテゴリーにとらわれ易いこと、感覚体験の偏見から逃れにくいことなどによって束縛されている。でも、このほかに誰もが自らの帰属する文化あるいはそれに近似した文化創造物のみに精通しうることによっても制限されている（それは、文化の細分化が進んで分散化した場合に、特別な力を伴って発揮される）。民族文化多様性原理のために、さまざまな民族間の交流は困難になっている、さらに文化間の差異が一定程度あれば、交流が全く不可能なものとなることもある。しかし、この否定的結果と並行して、民族文化多様性原理は一民族文化細分化が一定の有機的つながりの限界を越えない限り一人類にとって有益な好ましいものである。なぜなら、前述のことから明らかのように、この原理のおかげでのみ、様々な民族に文化的価値や道徳的に好ましい、精神的に人を高める文化価値出現の可能性があるからである。このことを自覚して、人々はこの原理の否定的結果を辛抱し、不平を言わず自覚して自分なりの民族的限界性を我慢すべきである。

人々が肉体労働を軽減しようと努め、労働を少なくしようと目指すことは本質的に何ら罪深いものでなく、ごく自然なものであるが、他方、諸民族文化多様性の根絶を目指すこと、単一の人類共通文化創造を目指すことは事実上常に罪深いものである。それは、聖書が直接

描いているバベルの混乱の直前にあった人類の状態を作り出すことである。そして、その状態は必然的にバベルの塔建設の新たな試みをもたらすはずである。あらゆる世界統合は偶然ではない、それは本質的に無神論であり、反宗教であり、人の傲慢に満ちている。

この点で、現代ヨーロッパ文明の主要で基本的な罪がある。この文明は全世界において全ての独自の民族差異の解消と廃止を目指している。至る所で、画一的な生活様式と政治社会体制を導入し、同じ考え方を主導しようとしている。この文明は各個別民族の特色ある精神生活規範と文化を破壊しながら、それに取って代わるいかなる精神規範も与えなかった、そして与えることができない、ただ物的実利的あるいは合理的原理に立脚する表面的生活様式を植えつけようとしているだけだ。そのせいで、ヨーロッパ文明は、欧化された諸民族の精神面で未曾有の荒廃を引き起こしている、精神的創造面では彼らを不妊症にして、道德面では無関心や野生化を引き起こしている。同時に、この文明の忠実な伴侶は富と傲慢さへの欲望の強さである。ヨーロッパ文明は新たなバベルの塔づくりへの必然的な道を歩んでいる。ロマンス・ゲルマン文化が全人類文明を目指し始めた時期から、物的技術、純粋に合理的な学問、そして自己中心の功利主義世界観が最も優勢なものとなり、文化要素におけるその優勢度は時がたつとともに増加するばかりである。それ以外に何もない—日本人とドイツ人は論理、技術、物的興味でのみ意見が合う。そのせいで文化の他の要素と弾力性は次第に萎縮するに違いない。だが、精神面の単なる退廃の結果による文化均質化により、あたかも障壁が姿を消し、人々の交流が容易になったと考えたとすればそれは間違っている。全民族の個性喪失によって購われた「諸民族の友好関係」は卑劣な偽造である。自己中心の物的利害を最重視し、最新技術そのものが国際競争と軍国主義の動機となる時には、世界文明の思想そのものが帝国主義と世界支配の目論見を生み出すのである。精神文化面を退廃させたり、二義的なものとして軽視することは人々の道徳的荒廃、利己主義を異常に高じさせるだけであり、それは人々の交流の障壁を取り除かぬだけでなく、逆に交流の困難さを増すことになり、同一民族の個別社会グループの憎しみを増すことになる。全てこうしたことは世界文明、全人類文明を目指すことの不可避の結果である。そしてこの結果は、こうした志向そのものが背信的で、罪深いものであることを裏付けるものである。

民族文化と言語の多様性は細分化原理の結果である。この原理の作用は言語分野で最も明瞭に現れている。各言語はいくつかの大方言に分かれ、大方言はさらに方言、下位方言へと分かれる。その際、各方言はそれぞれにのみ固有の特徴以外に、同じ大方言に属する全方言に共通のいくつかの特徴を持つ。さらに、各方言は隣接方言の一つと統合されうる共通特徴を持つほかに、他の隣接方言との共通特徴も持つ、等々である。互いに隣接する大方言の間にはそれぞれの大方言の特徴を併せ持つ中間的方言が存在する。このように、言語はある方

言から別の方言へと少しずつ目立たぬように移行する方言の連続した鎖である。諸言語とは言えば、互いに語族に統合され、その内部で語派、下位語派などに区別することができる。こうした言語区分単位の枠内において、個別諸言語は言語内の方言と同様の位置を占める。つまり、ある語派に属する各言語は当該言語のみの独特な特徴を持つ以外に、語派全体に特徴的なものを有し、この語派の言語の一つと特別に近似した特徴を持ち、さらに他の言語との類似関係を示す別の特徴を持つ。ところで同系言語間にはしばしば中間的方言が存在する。語派における言語の位置と同様のことが、語族における各語派についても言える。語派、言語、大方言、方言といった諸概念には根本的区別は存在しない。ある言語総体を区分けするあらゆる単位が互いに極めて近似していて、言語話者と方言話者が通訳の助けを借りずに容易に相互理解し合える場合には、こうした言語単位は方言と呼ばれる、この方言グループが大方言であり、そして言語総体である。しかし、いくつかの個別方言話者が容易に相互理解不可能な場合は、方言は言語と称され、それらの方言グループは語派を形成し、その総体は語族となる。そこで、当該言語区分単位が言語かあるいは大方言かの議論がしばしば起こる。また同様に、中間諸方言が隣接する同系二言語のどちらに属するのかについての議論も起きる。その際、言語学手段のみで議論の大部分が解決されることはない。歴史を遡行すればかつては共通祖語とされる語族・語派グループに属する言語諸単位の関係は以上のようなものである。しかし、こうした起源上同系関係にある言語以外に、地理的に隣接した言語が起源とは無関係にしばしばグループにまとめられる。同じ地理歴史文化圏にあるいくつかの言語が、共通の起源によって条件付けられる類似特徴でなく、継続的隣接関係と類似した歴史過程によってのみ条件付けられる特別な類似特徴を持つことがある。発生原理に基づかぬこうしたグループのことを、私は「言語連合」⁷と名付けるよう提案する。こうした言語連合は個別諸言語間に見られるだけでなく、異なる語族の間でも見られる。つまり、起源が異なるいくつかの語族が同一の地理歴史文化圏に広まり、一連の共通特徴により語族連合にまとまることがある。例えば、今日の科学では互いの同族関係は否定されているものの、ウラル語族（ウゴール・フィン・サモエド語族）、チュルク語族、モンゴル語族、満州語族は多くの共通特徴によってウラル・アルタイ語族連合に統合されている。名詞に文法上の性区分があること、また語形成における語幹母音の交替・出現・消滅の可能特徴（с о б е р у 「（私は）集める」—с о б р а т ь 「集め終える」—с о б и р а т ь 「集める」—с о б о р 「収集」^{（訳者注1）}）によって印欧語族、セム語族、ハム語族、北カフカス語族は地中海語族連合とされている—おそらく、消滅した地中海地域のいくつかの言語もこの連合に帰属するだろう。こうした、発生上は親族関係にない言語連合は全世界に存在する。その場合、系統的分類における中間的方言の立場⁸を担いつつ、同一語族あるいは孤立言語が同時に二つの言語連合に帰属したり、あるいは、

二つの隣接言語連合の間でどっちつかずの立場に置かれていることもしばしばある。このように、発生による分類と非発生による分類の二つの可能性を考え合わせると、地上の全言語は虹状グラデーションのごとく互いに繋がる鎖の連続ネットワークをなしていると言える。そして、まさにこのような虹状ネットワークの連続性とその構成成分の漸次性によって、地上の総言語システムはその多種多様性にもかかわらず、ある種理解可能な不可分の一体を成している。このように、言語分野では細分化原理の作用はアナーキーな四散でなく、整った調和システムに結びつくものであり、このシステムでは全ての部分が明白な独自性を維持しつつ、全体の一体性が部分部分の個性喪失ではなく、虹状の言語ネットワークの連続性によって保たれている。

文化の分布と相互関係は、言語分類とは一致しない。同一語族のみでなく同一語派の諸言語の担い手が別々の文化タイプに帰属することがある。この状態を如実に示す例はハンガリー人（マジャール人）である。マジャール語に最も近い親族言語は北西シベリアのボグール語（マンシ語）、オスチャーク語（ハント語）である、ところが実はハンガリー人の文化とボグール・オスチャーク文化は共通性を全く持たない。とは言うものの、文化の分布と相互関係は、概して、言語の相互関係の原理に基づいている。ただしそこには差異がある。文化においては「語族」に相当するものの方が、「言語連合」に相当するものよりはるかに意義が小さい。

互いに隣接する個別諸民族の諸文化は常に類似した一連の特徴を持つものである。このために、当該諸文化間には一定の歴史文化圏が出現する。例えば、アジアにおいてはイスラム文化圏、インド半島文化圏、中国文化圏、太平洋文化圏、ステップ文化圏、北極圏文化圏などである。これら全ての文化圏の境界は互いに交差している、そこで混合的あるいは中間的タイプの文化が形成される。個別諸民族とその一部は文化に独自色を持ち込むことで当該文化を特殊化する。結果として、連続性による統一と調和のある虹状ネットワークが形成され、同時にその細分性によって果てしない多様性ができている。

細分化原理の作用の結果はこうしたものである。無秩序と思われる多種多様性の状況下で個別諸民族文化はそれぞれが比類のない個別独自性を維持しつつ、総体としてある種の連続した調和統一体を成している。諸民族文化の個別独自性を無視して、それらを統合するのは無理である、なぜならこれらの個別的歴史文化単位の共存に統一体の基盤があるからである。神によって定められた活動と発展の原理から導き出される当然で自然なこととして、この光景は、理解しがたいへんな複雑さと、同時にまた複雑な調和の点において壮大である。そして、この状態を人の手で破壊しようとする試み、生きた個別文化の自然な有機的統一体を個性のない全人類文化一独自性発揮の余地がなく、抽象的非現実性の点で貧弱一を機械的な統一によって取り替えようとする試みは、明らかに不自然であり、背神的であり冒瀆的で

ある。人類文化統合と画一的な人類共通文化創造の試みを背神的なものとしてこのように激しく無条件に非難することに反対して、キリスト教の全人類的有意義性があたかも事実の如く語られている。

キリスト教は地球の多くの宗教のうちの単なる一つであり、一定の歴史文化的条件の所産であると見なしている者にとっては、もちろん、この問題はまったく提起されない。そうした視点からすれば、一定の文化所産としてのキリスト教は他の文化所産と同列に置かれ、人類による多様な文化活動の全体構図の一要素として加えられている。こうした場合には、キリスト教に何ら全人類的意義を認めることはできない。

だが、キリストを神の子の化身の到来と見なし、キリスト教を唯一の真の宗教と認める者にとっては、「あなた方は出かけて行って、全ての民族を説得し、父と子と精霊の名によって洗礼をほどこしなさい」（マルコ福音28章19節）というキリストの言葉が、人類の文化統合は背神的行為あるとする論への、あたかも反駁のごときものとなっているようである。だがこの反対は実は見せかけのものにすぎない。キリスト教を神の啓示に立脚する絶対的真実と見なし、歴史プロセスへの神の直接的介入による真実と見なすことで、我々は一定の文化所産としてのキリスト教への視点をすでに放棄している。キリスト教の訓戒は、何らかの新たな文化要素を文化にもたらすものではない。ある人種と結びついたユダヤ主義、一定の文化と結びついたイスラム教、そして、原則として、あらゆる文化区分に反対する仏教等とは違って、キリスト教は人種と文化を超えながらも、人種と文化の多様性も独自性も排除するものではない。キリスト教の摂取により、一連の異教的文化要素の拒否とその変更を招くであろう。だが、変更の具体的な形態はキリスト教が遭遇している歴史文化的土壌によりまったく様々なものとなる。この精神では画一性は不要だけでなく不可能でもある。キリスト教はいわば実に様々なパン生地に入れられる「酵母菌」である、そして「発酵」の結果出来上がるのは、生地の組成によりまったく相異なったものとなる。それゆえに、比類ない個別民族文化の虹状の多種多様なネットワークは、もしも世界の全民族がキリスト教を摂取したとしても、持ち前の仕組みを維持するはずだ。

キリスト教は諸民族文化差異のいかなる均一化も、人類共通文化のいかなる創造も要求するものではない。宗教的戒律としてのキリスト教は不変である。歴史過程においてはキリスト教教義は変化しているのではなく、もっぱら解明されているのである。他方、文化はというと、本質的には人間の手腕のなせる業である。文化は歴史的变化、発展法則、さらに何よりも細分化原理に従うものである。唯一のキリスト教文化は内的矛盾である。キリスト教文化はいくつかのタイプがありうると言うよりも、あるべきである。キリスト教を摂取した各国民・民族は自分たちの文化要素がキリスト教に対立せぬように、その文化にもっぱら民族

的精神のみでなく、キリスト教精神の気風が漂うように、自らの文化を変化させねばならない。このように、キリスト教は民族独自の文化創造を排除するものではなく、逆に、新たな課題を与えることで、文化創造活動を刺激する。全てのキリスト教信仰民族には、その文化とキリスト教教会の教義・道徳・規範を合致させる課題、当該民族信者の心にキリスト教の一定の雰囲気をかもし出すことの出来るような聖堂・礼拝様式・備品を作り出す課題が与えられている—そして、各民族は、キリスト教が有機的に摂取され、民族気質とうまく融合するように、これらの課題を独自に解決しうるのみでなく、解決すべきである。

むしろこのことは、あるキリスト教文化の他文化への影響を決して否定するものではない。こうした影響は非キリスト教文化の間でも観察されている。こうした影響は文化発展の本質そのものと結びついており、文化発展の自然な過程で、諸民族的差異の均質化を決してもたらすものではない。ただ肝要なことは、ある文化の他への影響が抑圧的なものにならず、文化借用が有機的に消化吸收され、独自要素と異質要素から当該民族独自の精神気質にぴったり合致した新たな統一体が出来ることである。キリスト教会は一体性を持っている。その一体性は個々の地方教会の間の活発な交流によって維持されている。しかし、この交流は文化的統一がなくても可能である。教会の一体性は聖書、正典、教義、宗規の共通性の形で現れているものの、決して当該各民族の具体的生活様式や芸術や法権利などの形態で現れているわけではなく、それら民族生活様式や法権利によって聖書、正典、教義、宗規が当該民族の生活に適応しているのである。こうした形態を固定化する試み、同一教会に帰属しても同一文化には決して帰属しない諸民族的差異を排除しようとする試みは迷信と儀礼崇拜に基づくものであり、まずい結果を招くであろう。我々、ロシア人はニコン総主教時代にこうした差異解消をしようとしたため酷い苦しみを経験した。教会は分裂し、実生活面ではロシア民族文化組織体の抵抗力の弱化をもたらしたため、ピョートル時代の大混乱につながった。

このように、キリスト教徒にとってのキリスト教は何かある一つの明確な文化と結びついているわけではない。それは、ある文化の要素ではなく、実に多種多様な諸文化に持ち込まれる酵素である。アビシニア（訳者注：エチオピアの旧称）文化と中世ヨーロッパ文化は、双方ともにキリスト教文化であるものの、互いにまったく異なっている。

もし我々がキリスト教普及の歴史を注意深く見れば、それが首尾よく普及した所は、キリスト教が既存の外来文化要素としてではなく、酵素として受容された所のみであることを確信するだろう。有機的かつ実り多いものとしてキリスト教が受け入れられ定着した所は、キリスト教が民族文化の独自性を消滅させずに作り直したところでのみだったことが分かっている。そして、逆に、キリスト教普及の最大の障害の一つは、当該民族が常にある明確な外国文化とキリスト教とを間違った同一視することであった。

当該民族によるキリスト教の受入れ拒否が起き、おそらく、そこに不可解で宿命的な原因があるとすれば、幾多のケースにおいて大部分は、おそらく、宣教師が広めたのがキリスト教の教えそのものではなく、一定のキリスト教文化であったことに原因がある。正教会宣教師もこの過ちを犯した。ロシア国内での伝道はしばしばロシア化の手段であり、ロシア国外ではロシアの政治的影響力拡大のための手段であったことは周知の事実である。だが、この過ちの程度がより著しいのはカトリック、プロテスタント、英国国教である。ロマンス・ゲルマンの宣教師は何よりも先ず自らを文化伝播者と見なしている。彼らの全ての宣教活動は「合併分野」、植民地化、欧化、利権企業、外国商館、大農場などと結びついている。宣教師は神によって遣わされた啓示の真実の伝道者ではなく、植民地政策の代理人、あるいは、ある国家の利益代弁者である。宣教師はキリスト教ではなく、カトリック、プロテスタント、英国国教を伝道しながら、つまりロマンス・ゲルマン文化の下で定着し、その文化と緊密に結びついているキリスト教分派を広めながら、事実上、もっぱらこの文化そのものを伝えている。彼らの伝道上の成功は、もちろん、当該民族がいかにヨーロッパ文化に慣れ親しんだかの程度に依っている。ところで、この文明におけるキリスト教はもうずっと以前に後方に退き、混乱傾向が広がっているので、当然ながら、ヨーロッパ文明で育まれたキリスト教を文化要素として受容した現地人は（ところでこの文明ではこの要素は最重要ではない）、創造活動上、まったく実りを生まぬ、駄目なキリスト教徒となる。こうした伝道方法においてキリスト教に改宗するのは、自らの民族文化を有機的にキリスト教精神に作り直すことができる諸民族全体ではなく、自らの改宗の事実によって親しい民族文化の根幹から切離され、外国が経済的政治的意図を実行する際に代理人・協力者となり得る一部の個々人のみが改宗するのである。

こういう訳で、「あなた方は出かけて行って、全ての民族を説得し、父と子と精霊の名によって洗礼をほどこしなさい」というキリストの訓戒は、実のところ、遂行されぬままである。それが未遂行なのは、かなりな程度は、伝道が欧化手段となり、画一的な人類共通文化確立の道具に姿を変えたためである。その背神的本質については前述で明らかにしようと試みた。

諸民族の差異解消の希求をキリスト教伝道上不可欠であるとの引用によって弁明してはならない。なぜなら、まったく逆に、この伝道は民族文化解消を目指す本質的にアンチ・キリストの文化伝播活動と結束しているために、実りのない失敗したものとなっているからである。

注釈

- 1 バルト諸言語とは互いに近い親縁関係にあるリトア語、ラトビア語及び古代プロシヤ語（17世紀に消滅）のことを言う。
- 2 イタリア諸言語とはラテン語以外に、さらにアペニン半島に存在しラテン語に近い幾つかの言語を指す
ー そのうち重要なのはウムブル語、オスク語である。
- 3 かつて南部ロシアで住んでいた北イラン諸族（スキタイ・サルマト諸族）は、一部は東スラブ人と同化し、一部はチュルク遊牧民に駆逐或は吸収された結果かなり早い時期に姿を消した。スキタイ・サルマト諸族の子孫として残っているのが今日のオセチア人である。
- 4 音楽理論に詳しくない読者のために説明しておくが、この音階はピアノで黒盤を順番に弾けば得られる。
- 5 だが、演奏では移調が生じ、その結果として4音階となる。例えば、メロディは「ド、レ、ミ、ソ、ラ」で記されているものの、演奏では「ソ、ラ」の代わりに「ラ♭」となる、「ソ」は「ラ」よりも1オクターブ高いものとなる。
- 6 上記のソロダンスの他に、ロシアには輪舞ダンスのタイプもある。ただし、ロシア人におけるこのタイプのものはスラブ人、ローマ・ゲルマン人及び一部東洋民族のものとはまったく別種のものである。厳密には、ロシア輪舞は真の意味でのダンスではない、なぜなら輪舞参加者は何らステップを踏まず、必ずしも音楽に合わせもせずにステップを踏むからである。これは輪舞歌が主役を演じる遊び或は儀式行為の一種である。
- 7 ヨーロッパにおける「言語連合」の明白な例としてバルカン諸語—ブルガリア語、ルーマニア語、アルバニア語、新ギリシヤ語がある。これらは印欧語族のまったく異なる語派に属するものの、文法構造における共通特徴と細目の一致を多く持つことにより互いに統合している。
- 8 例えば、印欧語族は幾つかの項目（例えば接頭辞の欠如）によって、一般に、地中海言語連合に帰属しつつ、ウラル・アルタイ言語連合と近似している、特に、幾つかの個別ケースでウラル諸言語（ウゴル・フィン・サモエード諸言語）と驚くほど似ている。東シベリアの孤立諸言語（エニセイ・オスチャーク、ギリャーク、ユカギール及びいわゆるカムチャッカ諸言語、つまりカムチャダール、チュコト、コリャークの諸言語）はあたかもウラル・アルタイ言語連合と北アメリカ（エスキモー、アレウト）言語連合の中間的連結の環となっている。

- (訳者注 1) ウクライナ、ウクライナ語、ウクライナ人の独自性を認めなかった帝政ロシア時代の旧称
- (訳者注 2) ロシア人の旧称。小ロシア人（ウクライナ人）、白ロシア人と区別して用いられた。
- (訳者注 3) ブルガリアのフォークダンス、ソロ、ペア、チェーンなど様々な方法で踊る。
- (訳者注 4) 異族とは、帝政ロシア時代における非ロシア人の公式名称
- (訳者注 5) 男性の民族衣装で、ゆったりしたシャツ
- (訳者注 6) ロシア語の単語「ラスコール」は多義語であり分離派、分裂などの意味がある。ここでは、前文の「分裂」を受けて同一単語を分離派の意味で使っている。
- (訳者注 7) 分離派と同義。教会改革に反対抗議活動をし、分離した信徒の総称として古儀式派とも呼ぶ。
- (訳者注 8) 派生語関係にあるカッコ内で示した語は、「CO」の後に続く音連合が異なっている。それぞれ、「б е р」、「б р」、「б и р」、「б о р」となっており、「б р」の間の母音が交替したり、消滅したりしている。